

左派「復帰論」における イデオロギーとしての「日琉同祖論」 ——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む

崎濱 紗奈

1. はじめに

本稿は、戦後沖繩において展開された、沖繩をめぐる施政権をアメリカから日本へ返還するよう求めた大衆運動である「祖国復帰運動」を支えた「日琉同祖論」という言説が、いかにしてイデオロギーとして生成・表象されたのかを検討するために、その具体的一例として、比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』（岩波新書、一九六三年）を分析する。後述するように、「日琉同祖論」は革新勢力・保守勢力からともに参照されたが、今回は前者の「日琉同祖論」イデオロギーの典型として『沖繩』を扱う。

この問いは、沖繩近現代思想史における戦前と戦後の断絶を埋める作業に着手したいという筆者の動機に基づいている。沖繩戦という未曾有の事態、及びその後二七年に亘って継続した米軍による統治というインパクトの大きさが、一九四五年を境に時代を区切るという歴史観が暗黙のうちに沖繩研究において形成されてきた。しかし当然ながら、戦争によって全てがリセットされたわけではなく、むしろ、戦前期に醸成された思想が陰に陽に戦後の思想を規定している。その規定の有様の具体的かつ象徴的な一例として、「日琉同祖論」という言説がある。

この言説は、「祖国復帰」（以後「復帰」と記載する）と呼ばれる、戦後沖繩

にとって最大の政治的出来事を後押ししたという意味で、政治的イデオロギーとしての性格を強く帯びていると言えよう。独立や信託統治という、別の選択肢を押さえて、「祖国日本」への「復帰」を求めるといふ欲求は、戦後沖縄最大の大衆的な政治・社会・文化運動として展開した。戦前期から存在していた「日琉同祖論」が、戦後どのようにイデオロギーとして再構成され「復帰」を後押ししたのか、という問いが本稿の関心事である。第二節で論じるように、「復帰」を主張する議論（以後「復帰論」と呼ぶ）の中には、右派的な民族主義・国家主義から左派的な民族主義・国民主義に至るまで、幅広い政治的・思想的態度が含まれていた。本稿で分析する『沖縄』は、小熊英二が指摘したように「この時代の革新ナショナリズムを、色濃く反映したもの」¹であり、左派的な「復帰論」の典型をここに見出すことができる。

にもかかわらず、このテキストはこれまで詳細に検討されることはなかった。むしろ、『沖縄』に象徴される左派「復帰論」を痛烈に批判した、「反復帰論」²という思想的系譜が近年の沖縄現代思想史では花形のテーマとして扱われてきたという経緯があり、そうした状況下において『沖縄』はいわば、忘れられたテキストとして後景化されてきた観がある³。また、同じく第二節で述べるように、「復帰」に関する研究は、「復帰」という出来事の全貌の捉え難さ

¹ 小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、一九九八年）、五五〇頁。

² 「反復帰論」も左派的な議論であるが、「復帰論」が日本共産党の公式の立場であったのに対し、「反復帰論」は新左翼的な言説の影響を強く受けている。また、「復帰論」が日本という国家を前提としているのに対し、「反復帰論」は国民国家という制度そのものを問い直すという思想的立場を取っている。小松寛『日本復帰と反復帰——戦後沖縄ナショナリズムの展開』（早稲田大学出版部、二〇一五年）を参照。

³ 『沖縄』に対する最も痛烈な批判として、森秀人『甘蔗伐採期の思想——組織なき前衛たち』（現代思潮社、一九六三年）がある。『沖縄』を批判した「反復帰論」の論者たちの多くは、本書を参照している。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読むゆえに、個別的な領域で詳細な研究が積み重ねられてきたという事情があり、『沖繩』はそのいずれの領域においても正面から検討されるべき対象とされてこなかったとも指摘できるだろう。

だが、すでに上に述べたように『沖繩』を分析することによって、左派的な「復帰論」の思想的特徴を掴み取ることができるし、さらには、左派的な「復帰論」が「日琉同祖論」というイデオロギーをどのように生成させ、これを活用したのかを知ることができるという意味で、このテキストの重要性ははまだ失われていない。

以下、第二節では、「復帰」という政治的出来事をめぐって、先行研究でどのように論じられてきたのかを概観する。続く第三節では、『沖繩』がどのような論点によって構成されているのか、テキストを具体的に参照しながら分析する。第四節では、第二節・第三節を踏まえた上で、「日琉同祖論」という言説が、『沖繩』においてどのように展開されているのかを検討する。結論では、「日琉同祖論」という言説が、単なる学問的立場の表明ではなく、イデオロギーとして機能していることを指摘して、本稿を締めくくりたい。

2. 「復帰」という出来事の捉え難さ

周知の通り、一九四五年の敗戦に際し、日本は主権を喪失し連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の統治下に置かれることとなった。一九五一年に署名され、一九五二年に発効されたサンフランシスコ講和条約により日本は主権を回復したが、沖繩・奄美諸島・小笠原諸島に関する施政権はアメリカに属することとなった。この条約が発効された四月二十八日は、沖繩では「屈辱の日」と呼ばれている。この呼称は、藤沢健一によれば、一九六〇年代以降、大衆運動として発展していった「祖国復帰運動」において定着化していったという⁴。

⁴ 藤沢健一『沖繩・教育権力の現代史』（社会評論社、二〇〇五年）、七六頁。

「祖国」である「日本」から切り渡され、「沖縄はアメリカの施政権下に売り渡され、苦難を強いられ、人間としての尊厳を奪われた」⁵ という意味で「屈辱の日」と呼ばれる四月二十八日は、一九七二年に施政権がアメリカから日本に返還され「復帰」が実現した五月十五日と並んで、沖縄では今でも毎年記念されている。

(画像1)「復帰・平和運動／祖国復帰県民総決起大会」(那覇市歴史博物館所蔵、資料コード02007568。1964年4月28日、那覇市真和志／与儀にて撮影。)



だが、「復帰」を求める声は、はじめから主流派であったわけではない。上地聡子が指摘するように、「復帰」が初めて公的な場で主張されたのはサンフ

⁵ 社会民主党所属の衆議院議員・照屋寛徳(一九四五-二〇二二)によって提出された、平成二五年三月二六日提出質問第三九号「いわゆる4. 28「主権回復の日」政府式典に関する質問主意書」より引用。日本国衆議院公式ウェブサイト「第一八三回国会質問の一覧」より。質問全文は以下URLを参照のこと(二〇二三年十月二六日閲覧)。
https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a183039.htm

⁶ 上地聡子「競われた青写真——一九五一年の帰属議論における「復帰」支持と、論じられなかったもの」早稲田大学琉球・沖縄研究所編『琉球・沖縄研究』第一号、二〇〇七年三月、七頁。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
ランシスコ講和条約を目前にした一九五一年前半のことであった⁶。同じく上地によれば、当時の帰属議論に関する沖繩の地元政党の立場は、「復帰」（沖繩人民党、社会大衆党）、「独立」（共和党）、「信託統治」（社会党）という立場に大別できる。つまり、当初は「復帰」以外にも複数の選択肢が模索されていたというわけだ。その後なぜ、「復帰」が多数の支持を集めていくことになったのか、という問いに対して、上地は小熊英二、鳥山淳、櫻澤誠によって提示された仮説を次のように整理している。まず、小熊は「日本人」になるために支払った「過去一世紀」の努力を無駄にしたくない⁷という感情が「復帰」論を強く規定していたのではないかと指摘している。次に、鳥山や櫻澤は、米軍基地の建設・拡充、およびそれが永続化することへの危機感が、大衆による「復帰」支持の要因として強く機能したのではないかと指摘している⁸。

このように整理すると一見、沖繩の人々は、日本による統治か、それともアメリカ＝米軍による支配か（「独立」もまた、アメリカの庇護のもと模索された道であった）という二択に迫られて、そのいずれかを選択させられた、という構図が存在していたかのようなのである。だが上地がそもそも問おうとしていたのは、「復帰」「信託統治」「独立」という対立軸に振り分け不可能な領域が複数存在していたにもかかわらず、なぜ「復帰」が最終的に多数の支持を集めるに至ったのか、という問いであった。そうであるがゆえに、先行研究のいずれの説明にも上地は満足していないのである。さらに言えば、多数の支持を集めた「復帰」でさえも、一つのカテゴリーとしてまとめることが事実上不可能であるような多様性を内側に含み込んでいた。言ってみれば「復帰」とは、それが終わってしまった現時点から過去を振り返った時に遡行的に見出され得る一

⁷ 小熊前掲書、四九七－四九八頁。

⁸ 鳥山淳「復興の行方と沖繩群島知事選挙」一橋大学一橋学会編『一橋論叢』一二五巻第二号、一八三－一九九頁。鳥山淳『沖繩 / 基地社会の起源と相克——一九四五－一九五六』勁草書房、二〇一三年。

つの「物語」に過ぎないのであり、実際には単線的ななめらかな繋がりを持った言説・運動・政治的出来事としての「復帰」あるいは「復帰論」というものは存在しないと考えた方が適切であると言えよう。ゆえに、「復帰」や「復帰論」を語る際に意識されるべきは、定まった「歴史」としてではなく、切れ切れにしか見出せない痕跡を、ミシェル・フーコーが提唱したような「系譜学」⁹という方法で書き記すという態度であろう。

富山一郎や戸邊秀明が指摘してきたように、「復帰論」の発生を考える上で重要なのが、在本土沖縄出身者の存在である¹⁰。両者が注目するのは「沖縄人連盟」という、一九四五年十二月に東京で結成された、沖縄出身者に対する生活援護や物資救援を目的として結成された団体である。近代沖縄を代表する思想家である伊波普猷（一八七六—一九四七）を代表に据え、大濱信泉（一八九一—一九七六）、比屋根安定（一八九二—一九七〇）、比嘉春潮（一八八三—一九七七）、永丘智太郎（一八九一—一九六〇）らが発起人となって結成された¹¹。発足当初の沖縄人連盟は、その名称からも分かるように、「沖縄人」という主

⁹ ミシェル・フーコー「ニーチェ、系譜学、歴史」伊藤見訳、（小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション』三、ちくま学芸文庫、二〇〇六年、三四九—三九〇頁）。

¹⁰ 富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」——「日本人」になるということ』（日本経済評論社、一九九一年）第四章。戸邊秀明「史料紹介：戦後沖縄における政治活動の出發——比嘉春潮文庫資料『沖縄の現状報告』の意義と射程」民衆史研究会編『民衆史研究』第六〇号、二〇〇〇年十一月、三九—五四頁。

¹¹ 沖縄人連盟の発案者は松本三益（一九〇四—一九九八）であったが、共産党員であったため、GHQ から危険団体視されることを避けるために松本は発起人に名を連ねることを避けた。

¹² こうした立場を牽引したのが永丘智太郎（旧姓饒平名、一八九一—一九六〇）である。櫻澤誠によれば、永丘は戦前、創成期の日本共産党に参加したが、一九三〇年代半ばに転向した。一九三七年七月以降、政府の囑託として植民地政策研究に従事する中で、ソ連の民族理論の影響を強く受けるようになっていった。この民族理論を援用する形

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む体を「日本人」とは異なるものとして前景化させ、沖繩の独立を支持する立場を表明していた¹²。だが、こうした立場は後に改められ、一九四八年三月に行われた第三回沖繩人連盟全国大会、および八月に行われた臨時大会において、「復帰論」へと急旋回を遂げた。その背景には、「独立」を主張した沖繩青年同盟を中心とする革新勢力が連盟を支配することを危惧した保守勢力の台頭があった¹³。

富山によれば、日本本土における「復帰論」は、「皇国護持の大精神に基づき […] 領土奪還を期する」ことを目的として、日本の敗戦直前に結成された「報国沖繩協会」（後に「沖繩協会」と改称）に端を発する¹⁴。ここに集った者たちに共通する精神性として、富山は「非日本人」であった「沖繩人」が、「日本人」になろうと努力を積み重ねてきたその努力に対する怨念ともいえる

で、戦後永丘は沖繩独立論を主張した。櫻澤誠「戦後初期の沖繩における復帰論／独立論の再検討——講和交渉機の帰属論争の思想的内実」（日本思想史学会編『日本思想史学』第三九号、一五〇—一六八頁）を参照。また、富山が指摘するように、沖繩人連盟において主張された「沖繩人」という主体には、独立の主体となる少数民族としての「沖繩人」という意識以外にも、GHQや日本政府と交渉する上で、自らの利益を最大化するために戦略的に「沖繩人」という名乗りを挙げるといった態度が含まれていた。富山前掲書、二六六頁を参照。

¹³ 連盟内部におけるこうした対立は、発足当初から存在していた。独立を志向する勢力が「沖繩人連盟」という名称を主張したのに対し、保守勢力は「沖繩県人連盟」という名称を主張した。「日本人」とは異なる主体として「沖繩人」を全面化させるのではなく、沖繩はあくまで日本の一部であり、そうである以上「沖繩人」ではなく「沖繩県人」という名称を用いるべきだとするのが、保守勢力の主張である。富山前掲書、二六三頁。

¹⁴ 一方、沖繩では戦前の首里市長であった仲吉良光（一八八七—一九七四）が、戦後いち早く「復帰論」を主張した。小熊前傾書（四八九—九一頁）、納富香織「仲吉良光論——沖繩近現代史における「復帰男」の再検討」（東京女子大学学会・東京女子大学史学研究室編『史論』第五七号、四四—六二頁）を参照。

¹⁵ 富山前掲書、二六七頁。

こだわりであり、いわば疎外を動員とした強烈な「日本人」志向¹⁵を指摘している。戦前の日本社会において、「琉球人」「沖縄人」として差別視されることを恐れ、一人前の「日本人」になろうとしたエリート層が、戦後本土において「復帰論」を牽引した。こうしたエリート層が革新勢力に代わって主導権を握った結果、沖縄人連盟は「沖縄連盟」へと名称を変え、戦前に大蔵官僚を務めた神山政良（一八八二—一九七八）が会長に就任した。これ以後、「沖縄協会」において復帰運動を担っていたメンバーや国家主義者としてこれまで排除されていた人間が大量に参与、顧問として連盟に入り込んだ¹⁶ことにより、沖縄連盟は「復帰論」を全面的に主張していくこととなった。

また、戸邊秀明が分析するように、沖縄人連盟＝沖縄連盟における「復帰論」への旋回は、沖縄現地における帰属論に対しても大きな影響を与えた。戸邊は、「在本土沖縄人が文化人を中心に、在郷土沖縄知識人に対して強固な文化的ヘゲモニーを有していた」¹⁷がゆえに、「講和会議が近づくと、在本土沖縄人からは在郷土沖縄人の復帰嘆願の世論が低調であると恫喝に近い「激励」が繰り返され¹⁸たと指摘している。

以上のような流れに基づけば、「復帰論」は、「独立」を主張した革新勢力を押し退けた保守勢力によって主張され、影響力を拡大していった言説であると位置付けることができるかもしれない。しかし実際は、「復帰論」の系譜は保守派に由来するものだけではない。重要なのは、「復帰論」への旋回は必ずしも保守勢力によってのみではなく、革新勢力内部においても生じた、ということだ。象徴的なのは、日本共産党における沖縄独立支持から「復帰論」への転回である。

¹⁶ 富山前掲書、二六八頁。

¹⁷ 戸邊前掲論文、五一頁。

¹⁸ 同上。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖縄』を読む
一九四六年二月二四日、日本共産党第五回大会において「沖縄民族の独立を祝ふメッセージ」が採択され、先述した沖縄人連盟に対して送られた。この時、戦後初代の日本共産党書記長を務めていたのが、沖縄出身の徳田球一（一八九四—一九五三）であった。このメッセージは、「沖縄人」を「数世紀にわたり日本の封建的支配のもとに隷属させられ、明治以後は日本の天皇制国家主義の搾取と圧迫とに苦しめられた」¹⁹ 少数民族とみなし、日本の敗戦を解放の契機として位置付けている。森宣雄が指摘するように、このメッセージは後に共産党内部で否定された。その後到来したアメリカ軍による過酷な軍政を予見することができずに、同軍を解放軍とみなし、その下で沖縄が独立することを推奨した安易な考えであるとして、その認識の甘さや誤りが批判されるに至ったのである²⁰。

森は、独立メッセージは、単に「沖縄民族」の自決を促したというよりは、沖縄と日本本土それぞれに人民政府を樹立させ、最終的に二つの政府が連邦国家を築くことによって、最終的に世界革命に到達するというシナリオを想定していたことを指摘する²¹。だが、独立—再結合という構想は、冷戦が激化する中で「沖縄で中ソに向けた爆撃基地が確実に構築されている事態をただ座視している」²² として、スターリンのイニシアティブによるコミンフォルムによって一九五〇年一月、日本共産党に対する批判が行われた。この批判を受け入れた日本共産党は、独立—再結合構想を否定し、「分離独立なき結合論」²³ すなわち民族統一を最優先課題として位置付ける「復帰論」へと舵を切った。

¹⁹ 中野好夫編『戦後資料沖縄』（日本評論社、一九六九年）、六頁。

²⁰ 森宣雄『地のなかの革命——沖縄戦後史における存在の解放』（現代企画室、二〇一〇年）、八五—六頁。『沖縄』でも同様の見解が示されている。

²¹ 森前傾書、第一章を参照。

²² 同上、一三三頁。

²³ 同上、一三四頁。

興味深いのは、その後革新勢力による「復帰論」が、保守勢力による「復帰論」に極めて接近していくという事態である。小熊英二は、一九五〇年代の日本共産党に見られたいわゆる「革新ナショナリズム」が、「復帰論」にも大きく影響を与えたと指摘している。敗戦によってアメリカ帝国主義に軍事的・経済的に支配されている日本が、現状を打破するためには「階級闘争よりも民族独立を優先し、アメリカ資本に対して従属していない日本の民族資本家をもまきこんで、共産党を中心にした労働者・農民・民族資本の民族統一戦線をつくらねばならない」²⁴とする革新ナショナリズムの姿勢は、「日本民族」という主体を前景化させ、「皮肉にも、ナショナリズムの悪しき姿とされていた「皇国史観」に近づいていってしまった」²⁵という、奇妙な事態を出来させた²⁶。

同様の事態は、『沖縄』の著者である歴史家・新里恵二（一九二八—二〇一三）の議論に色濃く見られる。森宣雄が指摘するように²⁷、在本土沖縄出身共産党員であった新里は、喜久里峰夫・石川明とともに一九五七年に執筆した「現代沖縄の歴史」と題された論文の中で、「沖縄民族の独立を祝ふメッセージ」を「日本の民主勢力の沖縄県民への支援と相互の共闘を大きく阻みさえした」と非難し、反対に、保守派の「復帰論」の論客である仲吉良光を「よく将来起こり得べき事態を予測した」²⁸として高く評価した。

重要なのは、仲吉が主張したような保守的な「復帰論」も、新里が展開する左派的な「復帰論」も、どちらも「日本民族」の一部としての「沖縄」を位置

²⁴ 小熊前傾書、五二五頁。

²⁵ 同上、五三九頁。

²⁶ 小熊は具体例として、歴史学者の藤間生大（一九一三—二〇一八）や藤谷俊雄（一九一二—一九九五）の議論を分析している。

²⁷ 森前傾書、九九頁。

²⁸ 新里恵二・喜久里峰夫・石川明「現代沖縄の歴史」歴史科学協議会編『歴史評論』第八三号、一九五七年一月、三七頁。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
付けるという認識を共有しており、そのための根拠として「日琉同祖論」を持ち出していることである。例えば仲吉は、一九四六年にマッカーサーに提出した復帰誓願書の中で、「沖繩人は日本人種であり、言語、風俗、習慣、信仰も同一」と述べ、「血は水よりも濃しといわれる如く、沖繩全住民は、日本民族たる自覚強烈、いかなる境遇に陥るも、本土同胞と運命を共にしたいとの念願が支配的であります」と訴えかけた²⁹。一方の新里もまた、「沖繩人が人類学的に日本人の一分岐であり、その言葉が言語学的に日本語の一方言であり、その文化が強い地方色をもつとはいえ、日本文化の一潮流であることは、今日内外の学者の間にほとんど異論をみない所といってよい」³⁰とを述べ、沖繩が異民族ではなく、日本の一部であることを強調した。新里のこうした見解は、『沖繩』に共通して見出されるものである。

3. 左派「復帰論」の典型としての『沖繩』

『沖繩』は、次の「あとがき」に見られるように、「復帰」を全国的な世論として押し上げることを大きな目的としていた。そして、その目的を阻む要因に、沖繩の人々を異民族視する本土側の視線があることを本書は指摘している。

沖繩の言語や風習や人種などの問題で、同胞としての一体感にすっきりしないあいまいさがつきまとう結果になっている。「沖繩の人は人種的にもほんとに日本人なんだろうか」という疑問は、なんとなくあいまいな形

²⁹ 沖繩県祖国復帰闘争史編纂委員会編『沖繩県祖国復帰闘争史資料編』（沖繩時事出版社、一九八二年）、六―八頁。小熊英二によれば、この請願書に「日琉同祖論」を盛り込んだのは、仲吉とともにこの誓願書の提出者として名を連ねた歴史家・東恩納寛惇（一八八二―一九六三）の提言によるものであった。小熊前傾書、四九〇頁。

³⁰ 新里ほか「現代沖繩の歴史」、四頁。

で、まだ国民の広い層をとらえているというのが実情だろう。そしてこのことは、とうぜん、沖縄の返還運動を全国民的なものにするうえで大きな障害になっているとおもわれる。³¹

つまりこの本は、言語・風習・人種という観点から見て必ずしも「日本人」「日本民族」であるとは言えない、として「沖縄人」を異民族視している「無知」な日本本土の人々に向けて、沖縄について知ってもらうための啓蒙書として出版されたという性格を持っている。しかも、単なる啓蒙書というよりは、「同胞としての一体感」を日本本土の人々に持ってもらうということが、ここでは目的となっている。一体感、言い換えれば民族=国民(nation)としての共同意識に訴えかけることによって、「復帰」を沖縄個別の問題としてではなく、全国民にかかわる問題として捉えることを要求するのが、この本に込められた筆者たちの心願なのだ。

筆者の一人である新里恵二については先述したとおりの背景を持つ人物であるが、残りの二人についても説明を加えておきたい。まず、比嘉春潮(一八八三—一九七七)は、複数の顔を持つ、沖縄出身の異色の歴史家である。彼は晩年、在野の歴史家として『沖縄の歴史』(『沖縄タイムス』という沖縄の地元紙で連載。連載時は『沖縄民族の歴史』というタイトルだった)という大著を記したが、それまでに多くの紆余曲折を経てきた。沖縄師範学校卒業後、沖縄で小学校教員や県庁の官吏を務めた際に、主要な役職の多くが本土出身者に占められている状況に絶望したことを契機として、精神的煩悶の救いの緒を見出すべく、キリスト教、トルストイ主義、エスペラント主義、そして社会主義といったように、様々な思想的領域を渡り歩いた。また、当時沖縄県立図書館長を務めていた、第二節でも言及した近代沖縄を代表する思想家である伊波普猷の

³¹ 比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖縄』(岩波新書、一九六三年)、二一九頁。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読むもとを度々訪ね、生涯の師として仰ぎ、その後多くの活動を共にした。一九二〇年代半ばに伊波が再上京したのと前後して比嘉も状況し、改造社の編集者となった。大杉栄や堺利彦らの原稿取りをする傍らで、沖繩出身の社会主義者たちとの交流も継続するなど、社会主義の伴走者³²とも言うべき立場をとった。同時に、柳田國男が主宰する南島談話会の常任幹事を務めるなど、創世記の日本民俗学にも深く関わった。また、晩年は自宅を開放して定期的に沖繩の歴史に関する研究会を開催したが、新里恵二は、そこに足繁く通った一人である。

いま一人の著者である霜多正次（一九一三－二〇〇三）もまた沖繩出身で、旧姓を島袋という。沖繩県立第一中学校卒業後、旧制第五高等学校へと進学し、東京帝国大学英文科を卒業した。その後一九四〇年に召集され、各地を転戦した。戦後、『新日本文学』を主な活動場所として、戦時中の経験や、米軍統治下にある沖繩の現状に取材した作品を複数発表した。一九五六年に『新日本文学』に連載した長編である『沖繩島』で毎日出版文化賞を受賞し、作家としての地位を確立した。その後政治的対立の果てに新日本文学会を除籍された後、一九六五年に、日本共産党系の文学者の職能団体である日本民主主義文学同盟を結成し、副議長に選出された。一九七一年、長編『明けもどろ』で日本共産党が主宰する多喜二・百合子賞を受賞したが、その後同党と対立し、一九八七年には除籍された。

以上のように、新里・霜多は日本共産党と直接的な関係を持った人物であるのに対し、比嘉は直接的に党と関わりを持ってはいたわけではなかったが、戦前の社会主義運動に関与していたという来歴を持っているという意味で、三者ともに政治的・思想的に左派の立場に立脚した人物であると言えよう。以上のこ

³² 比嘉自身はボルシェヴィズムを支持する立場をとったが、いわゆるアナ・ボルの対立にはとらわれなかったために、社会主義運動に関わる沖繩出身者を幅広く繋ぐ、人間関係のハブとも言うべき役割を果たした。安仁屋政昭「社会主義思想の普及と労働者」（『沖繩の無産運動』ひるぎ社、一九八三年、一一－四〇頁）を参照。

とを前提とした上で、『沖繩』の具体的な構成、および論点について、以下整理していきたい。

本書は「Ⅰ日本のなかの沖繩」、「Ⅱ誤解された「琉球人」」、「Ⅲ沖繩史のあけぼの」、「Ⅳ薩摩治下の琉球王国」、「Ⅴ百姓一揆のない国」、「Ⅵ日本の近代化と沖繩」、「Ⅶ沖繩文化の地方色」、「Ⅷ歌と踊りの島」、「Ⅸ戦後の沖繩」という、九つの章によって構成されている。本書の論点は、次の五点に集約されるだろう。まず特徴的なのが、先にも述べたように、「復帰」を実現するべく、沖繩に対する国民的関心を高めるために、沖繩を含んだ上での「日本民族」「日本国民」という単位を強調しているという点である。次に、こうした民族・国民意識の妨げを生んだ要因として、薩摩藩による琉球支配を徹底的に批判しているという点である。三点目に、薩摩藩による指示を受けて農民を徹底的に収奪した機関として、琉球王府を厳しく批判するという態度が挙げられる。続いて四点目として、二点目・三点目の反動として、農民を収奪の関係から解放したとして、一八七九年に大日本帝国によって断行された「琉球処分」に対して肯定的な評価を与えている。そして五点目として、人類学・文学・民俗学・歴史学といった諸領域における学問的成果を総動員して「日琉同祖論」的言説を構成し、これを沖繩が「日本民族」「日本国民」の一部であることの根拠として参照しているという点が挙げられる。以下、順を追って見ていこう。

まず一点目について。「Ⅰ日本のなかの沖繩」では、沖繩を異民族視する日本本土側の無知が、沖繩が「復帰」することの妨げとなっていることが繰り返し説かれる。冒頭では、沖繩が「日本民族」「日本国民」の一員として払ってきた犠牲が省みられることなく、戦後の日本本土における国民意識の中で沖繩が忘却されていったことへの怨念が語られる。

おそらく祖国防衛のためにはらった沖繩県民の犠牲は、他のどの日本人にも劣らなかつたであろう。ところが、日本政府は、平和条約によってその

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
沖繩をアメリカに売りわたしたとき、沖繩県民にたいしてはひとことの挨拶も送らなかった。それは挨拶のしようがなかったというよりは、むしろその必要を感じていなかったといったほうがよさそうである。周知のように、敗戦によって日本人の国民意識、民族意識は、音をたてて崩壊した。沖繩にたいする国民的な連帯意識も、戦後ほぼ十年間は、ほとんど死んでいたといっても過言ではない。一九五二年に対日平和条約が発効したとき、日本人のなかの果たしてどれくらいの人が、この条約によって沖繩がどうということになったかを正確に知っていただろうか。³³

この忘却の結果、沖繩に関するニュースが報道されることがあっても、せいぜい「キプロス島やアルジェリアやキューバなどについての報道と同じく、自分たちの生活とは直接関係のうすい、よそごと」³⁴に対する同情に留まっていたと指摘し、このような「沖繩にたいするこうした無理解、国民的な連帯意識の弱さ」³⁵が「沖繩返還運動を全国民的なものにするうえに大きな障害になっている」³⁶と主張する。

続いて二点目について、上記の「連帯意識の弱さ」を後押ししているのが「沖繩にたいする一種の差別意識の問題」³⁷であると論じられている。この「差別意識」は「沖繩にたいしては、他の日本の国土とは多少ちがって、琉球という一種の異民族、異質の文化圏にぞくする僻地としてのイメージが、日本人の意識に、歴史的にうえつけられて」³⁸きたものであり、その原因は、薩摩藩に

³³ 比嘉ほか『沖繩』、四頁。

³⁴ 同上、七頁。

³⁵ 同上、一二頁。

³⁶ 同上。

³⁷ 同上、一四頁。

³⁸ 同上、一五頁。

よる琉球支配にあると論じているのが、「Ⅱ誤解された「琉球人」」、「Ⅳ薩摩治下の琉球王国」、「Ⅴ百姓一揆のない国」という三つの章である。

ここでは、次のような歴史観が示されている。すなわち、従来明朝・清朝の冊封体制下において朝貢貿易を営んでいた琉球王国の利益を収奪し続けるために、一六〇九年以降、実質的に王国を支配した薩摩藩が、自らおよび江戸幕府と琉球王国の関係が清朝に知られることを避けるべく、敢えて異国風の習俗を琉球王国の人々に強いたがために、日本本土においては琉球＝異国という認識が定着し、その結果、近代以降も沖縄県民に対する異民族視が継続した、というナラティブだ。

このような島津の政策のため、幕府、諸大名ならびに江戸および沿道諸藩の民衆は、沖縄人は日本人ではなく、まったくの異民族であるかのような印象をうえつけられてしまった。その影響は、しらすしらすのうちに現代にまで及んでおり、一部のんびとのあいだでは、沖縄人は、中国人に近い何かであり、日本人とは、人種的にも民族的にも、少しちがうのだという印象がもたれているようである。³⁹

また、興味深いことに本書では、一六〇九年以降の琉球王国は、独立国ではなく、薩摩藩の「一種の植民地」として位置付けられている。

薩摩藩と首里王府の政策は、日本本土にたいしては琉球を服属下の「異民族」として印象づけ、中国にたいしては琉球と薩摩の関係をひたかくしにするというものであった。その間にあって沖縄人は、唐・大和の御取合（中国・日本との交際）のため、中国人でも日本人でもない一種宙ぶらり

³⁹ 同上、三九頁。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
んな「琉球人」として行動することを強いられたのであった。このような
島津と首里王府の政策は、結果として内外に誤解の種をまき、将来にわた
って沖繩の不幸を準備していたのであった。慶長以後の琉球王国は、表む
きだけは「王国のかざり」を残していたが、事実上は薩摩藩の先制支配下
にある一種の植民地であった。⁴⁰

琉球王国を独立国と見做すか否かをめぐっては、小熊英二が指摘しているよ
うに、新里恵二と歴史学者・井上清との間で激しい応酬が行われた。この応酬
は、四点目の「琉球処分」をどのように評価するかという問題を大きく規定し
ているという意味において、重要である。井上は、琉球王国が独立国であつた
という前提のもと「明治政府がこれを併合したやりかたは、侵略といわざるを
えない」と主張した⁴¹。これに対して『沖繩』は次のように反論を加えている。

琉球処分が、このように、琉球がわの強い抵抗を圧えて武力的に強行され
たために、その歴史的評価をめぐって、史家のあいだにかなりの意見の相
違がみられる。たとえば井上清は、琉球処分は近代国家への「自然な民族
的統一ではなく、侵略的」な「武力併合」であつたとしているし（『日本
近代史』）、反対に伊波普猷は、それは「一種の奴隷解放」であつたと書
いている（『沖繩歴史物語』）。[…] 琉球は、少くとも一六〇九年の薩摩入
り以後は、決して独立国とはいえなかつたからである。むしろ、薩摩に年
貢をとりたてられる特殊な「領地」だつたといつていいのである。[…]
このように琉球が独立国ではなく、薩摩に支配される外藩だつたとすれ

⁴⁰ 同上、八九頁。

⁴¹ 小熊前傾書、五五〇頁。および井上清『条約改正』（岩波新書、一九五五年）、二六、
三〇頁。

ば、日本の近代国家の統一にあたって、これを他藩なみに沖縄県として版図に組み入れることは、やはり「侵略的な併合」とはいえないのではないか。⁴²

『沖縄』は、沖縄に対する異民族視を生んだ悪の根源として薩摩藩による琉球支配を位置付け、そこからの解放の契機をもたらしたとして「琉球処分」に高い評価を与えている。これは、上の引用にもあるように、伊波普猷の「琉球処分」評価を踏襲したものであると言えよう。

ただし、伊波は琉球を独立国と位置づけ、それに基づき「琉球民族」という主体性を称揚したのに対し⁴³、『沖縄』は、琉球の主体性そのものを否定しているという点に、両者の大きな相違がある。それは、三点目の特徴である、琉球王府に対する厳しい批判に見られる。「Ⅲ沖縄史のあけぼの」では、一六〇九年の薩摩侵攻以前の琉球の歴史が語られるが、そこで琉球王府は次のように性格づけられている。

首里王府は、列島中の先進地帯である沖縄本島中部に地をしめ、この地の経済力、ことに海外貿易からの利潤によって養われた軍事力にものをいわせて、周辺ならびに辺境の諸地域を支配し、制圧した。いっさいの余剰生産物と余剰労働力は、首里親国にあつめられ、城郭・道路・仏寺・池園・並木などの建設と造営に投入され、それらの集積のうえに、あでやかな貴族文化の花が咲きひらいたのである。地方における直接生産者の努力は、

⁴² 比嘉ほか『沖縄』、一二二-四頁。

⁴³ こうした態度は、伊波の初期の代表作『古琉球』（一九一一年）に色濃く見られる。ただ、伊波も琉球王国を全面的に評価したのではなく、一九二二年の『古琉球の政治』以降は、農民に対する王府の収奪的側面を強調するに至る。拙著『伊波普猷の政治と哲学——日琉同祖論再読』（法政大学出版局、二〇二二年）第三章を参照。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
収奪の強化と属島統治機構の整備によって、いたずらに中央を肥えふとら
せた。⁴⁴

また、「V百姓一揆のない国」では、このような王府に対し、農民は以下のような過酷な状況を強いられたと力説する記述が見られる。

いってみれば琉球列島は、年貢の米・麦・砂糖・鬱金・藍・唐芋などを生産するため薩摩藩が監督し首里王府が直営する農場（広い意味では一種のプランテーション・システムともいい得よう）であり、百姓は鞭うちによっておびやかされながら、そこで強制的に働かされているようなものであった。⁴⁵

先述した「琉球処分」に対する高い評価は、薩摩藩と並んで、農民を収奪した琉球王府に対する激しい批判に由来している。

もし人民が反対したのなら、武力による鎮圧は、あるいは「侵略」といえるかもしれない。[...] 琉球処分に反対したのは、そのことによって自分たちの支配体制がくずれることをおそれた琉球の支配階級であって、人民ではなかった。なぜなら、二六〇年にわたって薩摩と首里王府との二重の搾取に苦しんできた琉球人民にとって、明治の改革は、少くとも客観的、歴史的には、ある意味での解放を意味したからである。⁴⁶

⁴⁴ 比嘉ほか『沖繩』、七二頁。

⁴⁵ 同上、一〇三頁。

⁴⁶ 同上、一二四頁。

以上のように、『沖繩』は、沖繩に対する異民族視、あるいは差別視が「復帰」を阻害している要因であると定義し、そうした視点は薩摩藩の琉球支配によって生み出された誤った認識であることを主張している。同時に、薩摩藩、およびその支配下にあった琉球王府によって収奪された農民を「人民」と表現し、彼ら・彼女らが収奪的關係から脱却する契機として「琉球処分」を位置づけ、「日本民族」「日本国民」という単位の中で、彼ら・彼女ら「人民」は蘇生した、という物語を語って見せているのである。そして、その物語の正当性を担保するための根拠として持ち出されるのが、五点目の特徴である「日琉同祖論」である。

4. 『沖繩』における「日琉同祖論」

ここでまず断っておかねばならないのは、『沖繩』では決して、「日琉同祖論」という表現は用いられないということである。なぜなら、筆者たちにとって「琉球」とは、異民族視・差別視を象徴する呼称であるからだ。

沖繩の人びとが、琉球ということばを嫌うのは、もちろんそれが外からつけられた名前だからではない。ただそのことばが、たとえば「支那」ということばが、日本人の中国にたいする侵略の歴史とむすびついているように、「琉球」も、薩摩によるながい搾取と圧政——したがって別紙と差別の歴史と、ふかくむすびついているからである。⁴⁷

したがって、『沖繩』が主張しているのは、「日本」と「琉球」が同祖であるというよりは、「日本」と「沖繩」が人種的・文化的・歴史的に同一のルーツを持つということであり、本書が提示しているのは言わば「日沖同祖論」、ある

⁴⁷ 同上、二二頁。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
いは「日沖同一論」であると言えよう。ただ、先行研究では一般的に「日琉同祖論」という用語が使用されてきたため、本稿でもそれを踏襲してこの呼称を用いることにする。

「日琉同祖論」は、伊波普猷、東恩納寛惇、仲原善忠といった戦前期に活躍した思想家・歴史家らによって基本的に共有されていた言説である。その名の通り、「日本」と「琉球」が同一のルーツを持つことを主張した言説であるが、当初は鳥居龍蔵や金関丈夫といった人類学者によって、主に人種論的な側面から主張された。そしてその主張は、明治政府の沖繩統治を正当化するための帝国の学知として機能した。その後、伊波普猷らによってこの言説が受容され、彼ら自身の言説として再生産されたのは、帝国内部における琉球・沖繩差別に対する抵抗のための道具として活用されたがゆえであった、と先行研究では解釈されてきた⁴⁸。

筆者も、一九一〇年代から一九二〇年代にかけて展開された伊波の言説については、差別への抵抗として戦略的に「同祖」を主張するという態度が色濃く見られると解釈している⁴⁹。ただ、伊波の議論には生涯を通してこうした戦略性が一貫して見られるわけではない。彼の「日琉同祖論」に戦略性が強く読み込まれてきた原因はむしろ、伊波普猷研究が最も盛んに行われた一九七〇年代から一九八〇年代という時代状況が大きく影響していることも、筆者は同時

⁴⁸ 例えば大田昌秀「伊波普猷の思想とその時代」(外間守善編『伊波普猷——人と思想』平凡社、一九七六年、一四三-二〇七頁)、大城立裕「伊波普猷の思想——「琉球民族」アポリアのために」(外間守善編『伊波普猷——人と思想』平凡社、一九七六年、一一一-四二頁)、金城正篤・高良倉吉『伊波普猷——沖繩史像とその思想』(清水書院、一九七二年)、比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』(三一書房、一九八一年)、鹿野政直『沖繩の淵』(岩波書店、一九九三年)、小熊英二前掲書第十二章、石田正治『愛郷者伊波普猷——戦略としての日琉同祖論』(沖繩タイムス社、二〇一〇年)など。

⁴⁹ 拙著第二章。

⁵⁰ 同上、第一章。

に指摘してきた⁵⁰。すなわち、当時伊波普猷論を物した人々における「復帰」を求める心情、あるいは「復帰」をめぐる生じる複雑な民族・国民感情を、「琉球処分」という政治的出来事を前に、琉球・沖縄を「日本」という民族・国民の一部として位置付けるよう腐心した伊波の苦勞に重ね合わせるところから、上記のような「日琉同祖論」読解が生成した、という指摘である。

実際、民族統一戦線、すなわち「日本」と「沖縄」を同一民族とみなし、その統一・統合を絶対的に達成すべき目標として掲げ「復帰」を主張するという態度を基礎付ける理論的根拠として、伊波普猷の「日琉同祖論」は度々参照されてきた。それゆえに、「復帰論」を国民国家を前提とした狭隘な議論であり、「日本」に対する「同化主義」であると痛烈に批判した思想家・ジャーナリストである新川明（一九三〇—）は、「復帰論」を唱える者たちが理論的根拠として参照している伊波普猷の「日琉同祖論」を手厳しく批判し続けた⁵¹。これに対して、「復帰論」を展開する日本共産党およびその系列下にあった沖縄人

⁵¹ 例えば、新川明『反国家の兇区』（現代評論社、一九七一年）、『異族と天皇の国家——沖縄民衆史への試み』（二月社、一九七三年）を参照。

⁵² 上田耕一郎・榎利夫・新里恵二・瀬長亀次郎・津波恒新・新原昭治・平山基生・与儀裕「沖縄問題とイデオロギー闘争」『前衛』第三二六号、日本共産党出版部、一九七一年七月、二九—八〇頁。佐次田勉「歴史的事実と清算主義——新川明記者の暴論をつく」『人民』第四四四号、沖縄人民党中央委員会、一九七〇年九月五日、六頁。

⁵³ 新里恵二「流行の伊波普猷論への違和感」（『伊波普猷全集月報』七、平凡社、一九七五年六月、一—三頁）、「流行の伊波普猷論の問題点——新川明とプーメランの使いかた」（『青い海』第四八号、おきなわ出版、一九七五年十二月、二四—八頁）、「駁・新川明の伊波普猷論——伊波の役割は犯罪的だったのか」（『青い海』第五二号、おきなわ出版、一九七六年五月、三四—四三頁）、「駁・新川明の伊波普猷論（下）——すぐれた学問は犯罪的たり得るか」（『青い海』五三号、おきなわ出版、一九七六年六月、一八—二七頁）、「私の伊波普猷論と新川明——マイ国家主義者の遁走曲」（『青い海』第五六号、おきなわ出版、一九七六年九月、四三—五五頁）、「犬は吠えても月は輝く」（『青い海』第五七号、おきなわ出版、一九七六年十一月、四一—三頁）。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
民党は激しく反論した⁵²。また、他にもない新里恵二こそが、新川明の最大の論的として、伊波普猷の「日琉同祖論」をめぐって激しい論争を展開した⁵³。ちなみに、本稿では詳述はしないが、新川は川満信一（一九三二-）、岡本恵徳（一九三四-二〇〇六）といった思想家らとともに「反復帰論」と呼ばれる政治・思想運動を展開した人物である。さらに付言しておく、「復帰論」と「反復帰論」の対立の背景には、日本共産党と新左翼の対立も大きく影響していたと指摘できよう。

つまり、「日琉同祖論」をどのように解釈するかということが、学問的解釈という枠を超えて、政治的イデオロギーとして争われるという事態が、この時期出来ていたと言えるのである。繰り返しになるが、「復帰論」の立場からは、民族統一戦線という発想のもと、沖繩を日本の一部として、さらに言えば沖繩の人々を「日本民族」の一部として同胞視するための根拠として「日琉同祖論」が持ち出されたのであり、反対に、「反復帰論」の立場からすれば、そのような民族主義＝国民主義（ベネディクト・アンダーソンの言葉を借りれば、「想像の共同体」としての「日本」という nation を仮構する態度）を批判するべく、彼らが依拠する「日琉同祖論」を徹底的に批判したのである。

『沖繩』を再び参照しよう。例えば本書では、次のように「日琉同祖論」が表現されている。

沖繩が完全に日本の一県となってから、民俗学・言語学・考古学・人類学などの各方面の研究がすすみ、いまでは、沖繩人は日本民族の一分岐であることが明らかになり、島津の政策の影響もうすらいできた。⁵⁴

このことを具体的に論証するために、「Ⅱ 誤解された「琉球人」」では「沖繩の

⁵⁴ 比嘉ほか『沖繩』、三九頁。

民俗と言語」という小節が設けられ、柳田國男や伊波普猷、服部四郎といった諸学者によって示された「日琉同祖論」を基礎付ける学問的成果が総動員されている。また、続く「考古学・人類学からみた沖繩人」では金関丈夫、須田昭義らによる学説が、同様の意図から参照されている。このように、「日琉同祖論」を前提とした上で、「Ⅶ沖繩文化の地方色」では、沖繩をあくまで日本内部の「地方」と位置付ける視点が語られる。

沖繩文化のなかに「文化」として完成し、「芸術」としてみがきあげられたものを求めるならば、人はあるいは失望するかもしれない。しかし、そこに日本文化の過去における達成されなかった豊富な可能性をさぐり、それを未来にむけて生かそうと考えるならば、われわれは、今日の日本文化を相対化してとらえることを可能にする、いくつかの視点を読みとり得るであろう。日本民族は、この地方文化から、無限の養分をくみとり得るはずなのである。⁵⁵

さらに、「Ⅷ歌と踊りの島」では、日本と沖繩が同祖であることを「血のつながり」という表現を用いて強く印象付けられている。

共通の祖語を話す民族は、いつか、どこかで共同の社会生活をしたことがある。それが、沖繩人と日本人とを結ぶ、いわゆる血のつながりであろう。⁵⁶

だが、興味深いのは、このような「血のつながり」を強調しながらも『沖

⁵⁵ 同上、一五五頁。

⁵⁶ 同上、二〇〇頁。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖縄』を読む』は、民族、あるいは国民としての同質性を強調しておらず、むしろその内部に複数の差異が存在していることを前提としているという点である。

明治いごの天皇制教育によって、わが国民のあいだには、民族とか人種についての奇妙な考えかたが、うえつけられている。それは、日本人は、鉾街道のはしから沖縄のはてまで、ぜんぶ同じ体質と同じ文化をもち、同じような歴史的発展をしてきたという考えかたである。つまり、どこかに完成した「日本人」または「日本民族」なるものがいて、それが、ある晴れた日に、どこどかと、琉球諸島をふくむ日本列島にやってきた、と考えるわけである。しかし、実際には、言語学・考古学・民族学などの発展で、先史時代には、日本本土にも、いくつかの文化圏が併存していたことが明らかになりつつある。沖縄の先史文化は、そのなかでも、独特の地方的特色をもっているが、それが、日本先史文化の一分岐であることは疑いえない。⁵⁷

ここには、「日本民族」を画一的な存在として捉えるのではなく、「いくつかの文化圏」をその内部に含み込むものとして解釈する立場が窺い知れる。つまり、『沖縄』で提示されている「日琉同祖論」は、偏面的な同化主義というよりは、複数の文化的差異を統合する概念として「国民」を定義するという性格を強く持っている指摘できるのではないか。ただ、本書では「国民」としての同一性が、「血のつながり」や人種論によって「民族」としての同質性ととも議論されるがゆえに、保守的な民族主義、あるいは戦前の国家主義を連想させるような要素を含み込んでしまっていることも、同時に見てとれるのである。これは、本書に限ったことではなく、小熊英二が指摘したように、「民族」とい

⁵⁷ 同上、五五頁。

う用語を「人民」や「民衆」といった用語と同義で語った当時の革新ナショナリズムに広く見られた現象であった⁵⁸。

5. 結論——イデオロギーとしての「日琉同祖論」

以上、「復帰論」の生成を概観した上で、とりわけ左派「復帰論」の典型とも言うべき『沖繩』において展開されている議論を詳細に検討した。本書の論点として、本稿では五つの論点に分けて整理したが、中でも一つ目の論点および五つ目の論点、すなわち、「復帰」を実現するべく、沖繩に対する国民的関心を高めるために、沖繩を含んだ上での「日本民族」「日本国民」という単位を強調しているという点、および、これを正当化するための論理として「日琉同祖論」が参照されているという点にこそ、本書の主眼が置かれていると言えよう。

本書において「国民」と「民族」という二つの概念がオーバーラップする形で表出されているという点は、前述した通りであるが、著者である比嘉・霜多・新里もまた、この点に無自覚であったわけではない。本書の最終章である「IX 戦後の沖繩」では、日本共産党の「独立を祝ふメッセージ」が痛烈に批判されている。これによれば、このメッセージは「資本主義成立以前のフォルクとしての民族と、それ以後のナチオンとしての民族を区別しない理論的混乱」であるがゆえに、誤った言説であるのだ。すなわち、「沖繩民族」という民族単位を見出す視点は「資本主義成立以前のフォルク」に基づくものであり、反対に、沖繩を含んだ上で「日本民族」を定義する『沖繩』の立場は「ナチオン」という単位を重視している、という主張である。この主張は、『沖繩』は、「フォルク」という単位において、「沖繩民族」という「日本民族」とは異なる「民族」が存在していようと、「ナチオン」すなわちとしての「日本民族」に

⁵⁸ 小熊前傾書、第二十一章。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読むは何ら影響を及ぼさない、ということの意味しているとも解釈できる。

だが、「日琉同祖論」を用いて「ナチオン」としての「日本民族」を定義しようとする『沖繩』の態度には、「フォルク」としての「日本民族」の内部に沖繩を包含させんとする欲望を見てとることもできる。例えば「Ⅱ誤解された「琉球人」という章において参照されるのは、『沖繩』が出版された当時において現存していた「川下り」という儀式が、古代日本にも行われていた習俗であったことを説いている。これ以外にも、琉球語と日本語が同一のルーツを持つ「琉球方言」と「本土方言」とであると説明する際にも、古代日本語と琉球語の共通性が強調されている。このように本書は、「ナチオン」としての「日本民族」の中に沖繩を含み込めるために、「フォルク」としての「日本民族」の中にすでに沖繩が含まれていた、という論法を用いているのであり、その際に最も強力なイデオロギーとして機能しているのが「日琉同祖論」であるのだ。

このように、『沖繩』には、「フォルク」と「ナチオン」を厳密に腑分けするようであり、同時に「ナチオン」から遡行的に「フォルク」としての沖繩と日本の同一性を強調しようとする態度が混在している。それは、「ナチオン」としての一体感を補強するために、「フォルク」としての一体感を同時に主張する、という論法であるようにも見える。

しかし、ここで注意すべきは、『沖繩』の著者たちは、沖繩が「フォルク」としての「日本民族」に包含される、あるいはされるべきである、と頭から信じ込んでいたわけではない、という点である。とりわけ比嘉春潮は、自身の大著『沖繩の歴史』（一九五九年）を当初「沖繩民族の歴史」というタイトルで新聞連載していたことから分かるように、「沖繩民族」という「民族」単位を否定していたわけではなく、むしろ「フォルク」としての「沖繩民族」を重視していたとも言えよう。

比嘉があくまで、パフォーマティブに「日琉同祖論」に依拠していたことが分かる一節が、彼の日記「大洋子の日録」（一九一一年四月二九日）に記され

ている。

琉球人種論。読了。日本人種であるとの結論。伊波先生の持論である。併し、先生がなぜこんな論を公にせらるるかに就いては、わけがある。先生の考へでは、今の琉球人は早く日本人と同化するのが幸福を得るの道である、其為めに右の様な論をする。向象賢や蔡温、宜湾朝保と云ふ人々も、決して日本ひいきの人でない、寧ろ支那崇拜の思想を持つて居た。併し、万人の幸福の為に同種族論を唱へて居た。伊波先生は勿論支那崇拜ではないが、琉球人を着絵文明人として恥ぢざる人種、或る特殊な文明を造り得た、又造り得る人種として、種族的自尊心を持つて居られる。ここが吾々の先生に服する所である。それで自分も時々、琉球人は大義名分を唱ふべき境遇でない、今こそ日本人と同種と言ふて居るが、如何なる時勢の変によりて、沖縄の指導者を以て任ずる人の口から支那同族論が唱へられるか知らぬと。⁵⁹

ここでは、「日本ひいき」ではなくむしろ「支那崇拜」であっても「日琉同祖論」を唱えてきた人物として、琉球王国時代の複数の政治家が言及されている。また、今後の情勢の変化によっては「日琉同祖論」に代わって「支那同族論」が持ち出されるかもしれない可能性も言及されている。

だが、これをもって直ちに、比嘉春潮は「日琉同祖論」を隠れ蓑にして「沖縄民族」というフォルクを守り抜こうとしたのである、と単純に結論づけることはできない。なぜならば、スラヴォイ・ジジェクが論じたように、イデオロ

⁵⁹ 比嘉春潮「大洋子の日録」『比嘉春潮全集』第五卷（沖縄タイムス社、一九七三年）、二九五頁。

⁶⁰ スラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出文庫、二〇一五年。

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖縄』を読む
ギーとは、それが真実であると信じ込むことによって駆動するのではなく、むしろ、その言説が真実であるかどうかは関係なしに、パフォーマティブな態度でもって同乗する際に、最も強力に機能するという性格を持っているからである⁶⁰。つまり、ここで重要なのは、比嘉春潮が「フォルク」としての沖縄と日本の同一性を信じ切っていないにもかかわらず「日琉同祖論」を主張したという態度こそが、「日琉同祖論」をイデオロギーとして強く機能させているという点である。

このように考えると、『沖縄』が、「フォルク」と「ナチオン」を弁別しようとしているのか、それとも「フォルク」としての「日本民族」の内部に沖縄をも含みこめようとしているのか、一見態度が揺れているように見えることも、頷ける。言ってみれば、比嘉をはじめとする著者たちにとって、それはどちらでもよい問題なのである。彼らが目的としたのは、あくまでパフォーマティブな態度として「日琉同祖論」をイデオロギーとして機能させ、「復帰」を日本民族＝国民というフォルク＝ナチオン全体に関わるものとして、すなわち全民族＝国民を挙げて取り組むべき政治的課題として表象させることであつたのだ。

参考文献一覧

安仁屋政昭『沖縄の無産運動』ひるぎ社、一九八三年。

新川明『反国家の兇区』現代評論社、一九七一年。

——、『異族と天皇の国家——沖縄民衆史への試み』二月社、一九七三年。

石田正治『愛郷者伊波普猷——戦略としての日琉同祖論』沖縄タイムス社、二〇一〇年。

井上清『条約改正』岩波新書、一九五五年。

上田耕一郎・榊利夫・新里恵二・瀬長亀次郎・津波恒新・新原昭治・平山基生・与儀裕「沖縄問題とイデオロギー闘争」『前衛』第三二六号、日本共産党出版部、一九七一年七月、二九-八〇頁。

上地聡子「競われた青写真——一九五一年の帰属議論における「復帰」支持と、論じられなかったもの」早稲田大学琉球・沖縄研究所編『琉球・沖縄研究』第一号、二〇〇七年三月、七-四〇頁。

大城立裕「伊波普猷の思想——「琉球民族」アポリアのために」外間守善編『伊波普猷——人と思想』平凡社、一九七六年、一一一-四二頁。

大田昌秀「伊波普猷の思想とその時代」外間守善編『伊波普猷——人と思想』平凡社、一九七六年、一四三-二〇七頁。

沖縄県祖国復帰闘争史編纂委員会編『沖縄県祖国復帰闘争史資料編』沖縄時事出版社、一九八二年。

小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』新曜社、一九九八年。

鹿野政直『沖縄の淵』岩波書店、一九九三年。

金城正篤・高良倉吉『伊波普猷——沖縄史像とその思想』清水書院、一九七二年。

小松寛『日本復帰と反復帰——戦後沖縄ナショナリズムの展開』早稲田大学出版部、二〇一五年。

佐次田勉「歴史的事実と清算主義——新川明記者の暴論をつく」『人民』第四四四号、沖縄人民党中央委員会、一九七〇年九月五日、六頁。

崎濱紗奈『伊波普猷の政治と哲学——日琉同祖論再読』法政大学出版局、二〇二二年。

櫻澤誠「戦後初期の沖縄における復帰論／独立論の再検討——講和交渉機の帰属論争の思想的内実」日本思想史学会編『日本思想史学』第三九号、一

左派「復帰論」におけるイデオロギーとしての「日琉同祖論」——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
五〇—一六八頁。

新里恵二・喜久里峰夫・石川明「現代沖繩の歴史」歴史科学協議会編『歴史
評論』第八三号、一九五七年一月、一—四九頁。

新里恵二「流行の伊波普猷論への違和感」『伊波普猷全集月報』七、平凡社、
一九七五年六月、一—三頁。

—、「流行の伊波普猷論の問題点——新川明とブーメランの使いかた」『青
い海』第四八号、おきなわ出版、一九七五年十二月、二四—八頁。

—、「駁・新川明の伊波普猷論——伊波の役割は犯罪的だったのか」『青い
海』第五二号、おきなわ出版、一九七六年五月、三四—四三頁。

—、「駁・新川明の伊波普猷論（下）——すぐれた学問は犯罪的たり得るか」
『青い海』五三号、おきなわ出版、一九七六年六月、一八—二七頁。

—、「私の伊波普猷論と新川明——マイ国家主義者の遁走曲」『青い海』第
五六号、おきなわ出版、一九七六年九月、四三—五五頁。

—、「犬は吠えても月は輝く」『青い海』第五七号、おきなわ出版、一九七
六年十一月、四一—三頁。

スラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出文庫、
二〇一五年。

照屋寛徳「いわゆる4. 28「主権回復の日」政府式典に関する質問主意書」
平成二五年三月二六日提出質問第三九号。

[https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/
a183039.htm](https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a183039.htm)

(二〇二三年十月二六日閲覧)。

戸邊秀明「史料紹介：戦後沖繩における政治活動の出発——比嘉春潮文庫資
料『沖繩の現状報告』の意義と射程」民衆史研究会編『民衆史研究』第六
〇号、二〇〇〇年十一月、三九—五四頁。

富山一郎『近代日本社会と「沖繩人」——「日本人」になるということ』日

東洋文化研究所紀要 第185冊

本経済評論社、一九九一年。

鳥山淳「復興の行方と沖縄群島知事選挙」一橋大学一橋学会編『一橋論叢』
一二五巻第二号、一八三—一九九頁。

—、『沖縄／基地社会の起源と相克——一九四五—一九五六』勁草書房、二
〇一三年。

中野好夫編『戦後資料沖縄』日本評論社、一九六九年。

納富香織「仲吉良光論——沖縄近現代史における「復帰男」の再検討」東京
女子大学学会・東京女子大学史学研究室編『史論』第五七号、四四—六二
頁。

比嘉春潮「大洋子の日録」『比嘉春潮全集』第五巻、沖縄タイムス社、一九
七三年。

比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖縄』岩波新書、一九六三年。

比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三一書房、一九八一年。

藤澤健一『沖縄・教育権力の現代史』社会評論社、二〇〇五年。

ミシェル・フーコー「ニーチェ、系譜学、歴史」伊藤晃訳、小林康夫・石田
英敬・松浦寿輝編『フーコー・コレクション』三、ちくま学芸文庫、二〇
〇六年、三四九—三九〇頁。

森宣雄『地のなかの革命——沖縄戦後史における存在の解放』現代企画室、
二〇一〇年。

森秀人『甘蔗伐採期の思想——組織なき前衛たち』現代思潮社、一九六三
年。

左派「復帰論」における
イデオロギーとしての「日琉同祖論」
——比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』を読む
崎濱紗奈

要約

本稿は、戦後沖繩において展開された、沖繩をめぐる施政権をアメリカから日本へ返還するよう求めた大衆運動である「祖国復帰運動」を支えた「日琉同祖論」という言説が、いかにしてイデオロギーとして生成・表象されたのかを検討するために、その具体的一例として、比嘉春潮・霜田正次・新里恵二『沖繩』（岩波新書、一九六三年）を分析する。

日本共産党に代表される左派は、民族主義の立場から、沖繩がアメリカによる異民族支配から解放されるべきであると主張した。その際に理論的な根拠として参照されたのが「日琉同祖論」である。「日本」と「琉球・沖繩」が同一の祖先を持つと主張するこの言説は、1879年に行われたいわゆる「琉球処分」を正当化するため、統治のための学知として活用されてきた。一方で、「日本」と「琉球・沖繩」が平等であることを主張するために、多くの沖繩の知識人がこの言説を支持した。『沖繩』もまた、差別への抵抗という側面から「日琉同祖論」を主張している。

だが、『沖繩』の筆者たちは、「日琉同祖論」を盲信していたわけではなく、パフォーマンス的に「日琉同祖論」を主張した。スラヴォイ・ジジエクによれば、イデオロギーとは、それが真実であると信じ込むことによって駆動するのではなく、むしろ、その言説が真実であるかどうかは関係なしに、パフォーマンス的な態度でもって同乗する際に、最も強力に機能するものである。ジジエ

クのこの定義に基づき、本稿では「日琉同祖論」をイデオロギーとして位置付け、それが『沖縄』においてどのように表象されているのかを分析する。

Abstract

This paper analyzes Higa Shunchō, Shimota Seiji, and Shinzato Keiji's *Okinawa* (Iwanami Shinsho, 1963) as a concrete example to examine how the discourse of “Nichiryū Dōso Ron (Theory on Japanese-Ryukyuan Common Ancestry)” was generated and represented as an ideology in support of the “Sokoku Fukki Undō (Homeland Reversion Movement),” a mass movement that developed in postwar Okinawa demanding the return of administrative authority over Okinawa from the US to Japan.

The leftists, represented by the Japanese Communist Party, argued from the standpoint of nationalism that Okinawa should be liberated from the domination of different racial groups by the U.S., referring to the “Nichiryū Dōso Ron” as their theoretical basis. This theory, which asserts that “Japan” and “Ryukyu/Okinawa” share the same ancestry, has been used as a governing theory to justify the annexation of Ryukyu in 1879. On the other hand, Okinawan intellectuals also supported this discourse to assert the equality of “Japan” and “Ryukyu/Okinawa.” In the same way, *Okinawa* also asserted the “Nichiryū Dōso Ron” for the purpose of resisting discrimination.

However, the authors of “Okinawa” were not just blind believers in “Nichiryū Dōso Ron,” but asserted it in a performative manner. According to Slavoj Žižek, an ideology is not driven by the belief that it is true, but rather functions most powerfully when it is carried out with a performative attitude, regardless of whether the discourse is true. Based on Žižek's definition, this paper will position “Nichiryū

Dōso Ron” as an ideology and analyze how it is represented in *Okinawa*.